

国際社会論特論A/環境動態学概説

2010年度後期期末定期試験問題

問 この講義では、国際学類の専門科目として「国際社会」を、その一方で共通教育一般科目として「環境動態」を同時にあつかってきた。時間と空間の中で、さまざまな要素が関係しお互いに影響をあたえつつ変化するさまを、両者に共通するいくつかの例をあげて解説してきた。

「国際社会」の基本単元は国家であり社会である。国家や社会を構成要素に細分していくと最終的には「人」にたどりつく。一方の「環境動態」は、さまざまな時空スケールをもつがゆえにこのような細分こそできないが、われわれ人類を思考の中心においた場合、基本的な要素としてはやはり「ヒト」を設定すべきといえよう。

ここで、「人」あるいは「ヒト」について考えてもらいたい。われわれはこの先どのような道をたどるのだろうか。どのように変化していくのだろうか。ここ数千年という期間では「ヒト」という生物自体は変化しないだろう。しかし、「人」の活動によって「ヒト」を含む地球の有機的环境は確実に変化している。化石燃料の多量の採掘と消費を考えると「人」の活動は無機的环境をもある程度は変化させているといえよう。

一方、カンボジアの近・現代史やマングローブ生態系の授業で述べたように、先進国の住民という一部の「人」の思惑によって、発展途上国の「人」は振り回され、生命はもちろんのこと、資源や文化という固有の資産を失いつづけてきた。先進国の主導で生物多様性の保全は声高に言われているが、地球上の文化の多様性はむしろ破壊される一方といえる。発展途上国でこの傾向は著しい。

2010年における世界総人口は約69億人と推計されているが、いまから50年後には約90億人に達すると予測されている。一方、もっとも重要な化石燃料である石油の可採埋蔵量は2007年の時点で41年（これは今後の開発で延びる可能性がある）と推定されている。

ではここで問題。50年後の地球を想像してもらいたい。きみたちが人生の終盤を迎えるところになる。想像の中心は「自然」、「環境」、「社会」、「人」、「ヒト」などのいずれでもかまわない。何かに立脚して考えてみる。どのような未来が描けるだろうか。解答用紙1枚にまとめること。